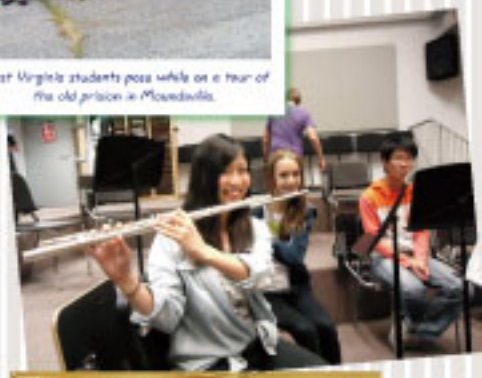
LABO High School Year Long Program

ラボ高校留学プログラム

第26期
アメリカ・カナダ
2013～2014

West Virginia students pose while on a tour of the old prison in Moundsville.



Welcome Orientation in Washington State.

公益財団法人ラボ国際交流センター

OVER AND BEYOND ALL

●ラボ高校留学プログラムは、1ヶ月交流の異文化体験をもっと深化させたい、世界の留学生と共に「英語力」や「社会性」をブラッシュアップしたい、そして10代のいまこそだから感じられるなにかを見

久志はるの（アメリカ・オハイオ州）

藤田成洋（アメリカ・ワシントン州）

神谷崇宏（アメリカ・ユタ州）

橋本 陽香

千葉支部北千葉地区　今来 弓子パーティ
<23期カナダグループ／
オンタリオ州(留学時は高校1年)>

初めてホストファミリーの家に着いたときに見た、近所の家もない広大な草原は今でも鮮明に思い出せる。夜、牛の鳴き声がうるさくて眠れないことも外に出るたびに牛の糞の匂いを嗅ぐことも二度とないだろう。今思い返すとその時はホームシックを成す要因でしかなかったこともいまではとても貴重で愛おしいことのように思える。家族ではない他人と一緒に住むことに違和感を感じ、毎晩泣いていた私が、日本に帰ってきた今、カナダに戻りたいとすら思っていて、留学生活を通じてあの場所に自分の居場所を見つけられたことや、なんだかんだ楽しんでいたことをあらためて実感している。

最初の4か月は話もわからず、自分から発言できる日なんて来るのかと本気で不安に思っていた。授業中も先生の言っていることがわからず、手を挙げて何度も質問するので、先生に迷惑な顔をされることもあったし、授業が終わってから質問しに行くのは日課だった。友達も留学生しかいなくて、本当に日本へ帰ってしまいたいと何度も思った。だが、部活を始めた頃から留学生が皆、国へ帰って行き、自分から行動を起こさないといけない状況になり、やっと重い腰をあげ、クラスや部活が同じ友達に勇気をもって話しかけ始めた。話しかけるといっても、その頃の私は "Good morning" と挨拶をすることしかできなかったけれど、皆笑顔で挨拶を返してくれ、廊下で会えば、名前を呼んでくれるようになった。そこからは風のように時が流れていった。

滞在中は、今までに経験したことのない行事に新しい経験をすることができた。ハロウィンでは死に神の衣装に扮装し、車で周辺を周り、pillowcase いっぱいにお菓子をもらって、クリスマスになっても食べきれずにいたり、クリスマスにはもみの木を切りに行って、飾り付けをしたり、木の下にあふれ出るほどたくさんおかれたプレゼントを、クリスマスの朝とても早く起こされて、家族全員で開けて楽しんだ。イースターにはウサギ型のケーキを作ったりもして、すべてのホリデイをめいっぱい楽しんだ。

学校ではバレーボールと陸上のクラブに入り、結果こそ残せなかったが、友達とふざけ合ってはお腹が痛くなるまで笑い、かけがえのない時を過ごせた。Lunch time は、いろんな友達と外に食事に行ったり、ホストママが作ってくれたお弁当を cafeteria や track で食べたりと、教室で寮屋に食べることに慣れていた私にはどれもが新鮮でとてもおもしろかった。日本に帰る間際になると、友達の家で遊んだり、映画やショッピングに行ったり、目まぐるしくもとても充実した毎日だった。そんな友達から貰ったネックレスやブレスレットは一生の宝物だし、カナダデイにオタワで見た花火をこれからもずっと忘れず、胸に刻んで大事にしていこうと思っている。

山あり谷ありな1年、諦めることなく、挑戦し続けて日本に帰ってこれたことは、自分に大きな自信になったし、支えてくれる人がいるから頑張れるのだと気づくことができたことで今までよりも物事をおだやかに考えられるようになった。私は留学生活を人生の宝物のひとつとして大切に、そしてこれからの人生に有効にこれを活かしていきたい。

プログラムの特徴

a. 強力なサポート体制

入国から帰国まで、ホームステイ生活、学校生活における安全管理、トラブル処理等について万全の体制が整えられています。

アメリカでは CSIET（国際教育旅行基準協議会）の認可をうけた団体が、カナダではカナダ青少年交流委員会が、それぞれ留学プログラムの運営に責任を持ち、各地に配置されているコーディネーターが留学生に適切に対応します。

現地では日本人のラボ・カウンセラーに常時相談できる体制となっています。カウンセラーは留学生からのマンスリーレポートに基づいたカウンセリングを行ないます。レポートの内容や留学生とのコミュニケーションは、タイムリーに東京のラボ国際交流センターに報告されています。

b. 充実した事前準備プログラム

留学生が自信をもって現地での生活をおくれるように、オリエンテーション、全国合同合宿などラボの長年の経験やノウハウを活かしたきめのこまかい事前準備プログラムが用意されています。

留学決定後は出発までの間、現地での英語での授業に対応できるように、参加者の英語力や学力に応じた研修プログラムに沿って学習をすすめます。

C. 現地オリエンテーションプログラムによりスムーズに留学生活へ

到着後、受入れ団体主催のウェルカム・オリエンテーションがあります。アメリカ留学生は各団体に集まる海外の留学生と共にプログラムのルールなどの最終確認をします。

カナダ留学生は、「2週間英語研修＋ホームステイ」スタイルのオーダーメイドプログラムで準備の総仕上げをしています。

POSSIBILITIES

見つけたい高校生のためのプログラム。●現地の学校生活やホームステイを通じて新しい自分に出会えるチャンスにあなたもチャレンジしてみませんか。

仁井 隆世

中国支部広島東地区　矢野 恵バーティ
<24期アメリカグループ／サウスカロライナ州(留学時は高校3年)>

“家族と自分を応援してくれる人を悲しませること以外は全部やってみる。逃ったらやる。”これは留学を決めたときに、自分の中で立てた目標だ。現地での日々は本当にあっという間で、おそらく自分の18年間の人生の中で、最も早い1年だった。そして、この1年にはこの目で見て、体験した新しいことが数えきれないほどたくさんある。いろいろなものがギュッと詰まって濃縮された、そんな感じ、これを「充実」というのだろう。今こういう気持ちでいられるのは、留学中ずっと自分自身の目標を実行し続けられたからだ。

“NOと言えない日本人”。これは、控えめに断ることで相手の気持ちを害さないようにする日本人独特の国民性を揶揄する表現だが、アメリカでの自分は少し違う意味でそうだったかもしれない。2つの選択肢が与えられれば、僕の答えは必ず YES。だってもし NOって言ってしまったら、その先はもうない。でも YES であれば、その先に想像もしなかったような大きくて新しい道が広がっている。自分にできるだろうか、失敗したらどうしようとネガティブな考えは必ず伴った。でもひとたび YESって答えたあとは、できるかできないかとかそういう問題ではなくて、うまくいくように自分の全力を尽くすのみ。意外となんとかなるものだ。そして以前とは違う次の新しい可能性に出会う。“NO と言わない日本人”、これが留学中の僕そのものだ。

留学を決断したことから始まった挑戦は、アメリカの学校で自分の生まれ育った広島についてプレゼンをしたこと、誘われるがままに観たこともなかったスポーツのクラブに参加したこと、女装コンテストで優勝したことなど、思い出すときりがない。そのすべては次のステップへとつながっていて、時には思い通りにいかずに悔しい思いをしたこともあったが、いまはそれも良い経験になったと思う。もしあの時自分が怖気づいて、やることをためらってしまっていたらと想像するとそのほうが今では怖いぐらいだ。これから自分が生きていく中で、人生の大一番と呼べるような大きな決断をしなければならない時が必ずあるだろう。そんなときに自分を信じ、胸を張って、“おう、やってやる!”って答えられ、その決断を裏切らずに何事も全力で取り組めるそんな人間になりたい。

もうひとつこの留学で学んだこと。それは、多くの人の支えがあって自分という存在があるのだということ。“自立する”ということは留学で達成したい僕の目標のひとつであり、これはこのラボ高校留学プログラムのテーマのひとつでもある。留学中は自分で考え、行動しなければならない。異文化の中で、今まで自分の周りにあたり前にあったものを、一から築いていかなければならない。以前の自分が見向きもしなかったことに向き合わなければならない。そんな環境の中で、自然と自立心が養われ、“あたり前”が、いかにかけがえのないものかを感じた。いつも気遣ってくれる家族、互いに影響し合える日本の仲間たち。自立とはそういう自分を大切に思って応援してくれる人なしにはなしえない。だから自分も同じようにそういう人を大切にしないといけない。大人に近づくにつれ、少しずつ自由と責任が与えられ、なんとなく自分は一人で生きているのだと錯覚していたことに気づけた一年でもあった。

留学を終えた自分は、山でたとえると5合目あたりにいる。この経験をいかにこれからの人生に活かしていけるのかがこれからの重要な課題だ。それぞれの道へと進んで行った仲間たちと、いつか頂上で広大な景色が見渡せるよう、ゆっくりと時間をかけながら次の目標に向かっていこうと思う。

Special Thanks the 24th delegates !
表紙は24期留学生のアルバムから～
①井沢奈々（アメリカ・ニューヨーク州）
②住友　麗（アメリカ・ユタ州）
③冠林慶喜（アメリカ・ワシントン州）
④大谷生亮（アメリカ・ユタ州）
⑤安永怜以（アメリカ・ウエストバージニア州）
⑥安永怜以・南　敦史（アメリカ・ウエストバージニア州）
⑦藤瀬優姫（カナダ・オンタリオ州）
⑧大田南美（アメリカ・ワシントン州）
⑨成田　碧（アメリカ・ワシントン州）
⑩南　敦史（アメリカ・ウエストバージニア州）

橋　結衣（アメリカ・ミネソタ州）

浜田真奈（カナダ・オンタリオ州）

藤田文道（アメリカ・ペンシルバニア州）

長澤美咲（アメリカ・ミズーリ州）

竹内颯志（カナダ・マニトバ州）

Chance! Challenge! Change!

Q. どうして留学してみようと思ったの？

A. 1ヶ月のホームステイは楽しかったけれど、言いたいことが伝え切れない思いが残ったんだ。留学ではもっと長い時間を過ごせるから、英語も上達するだろうし、新しい発見をする機会が増えるだろうと考えたのがきっかけ。目標はもちろん達成できたこともたくさんあったし、満足できなかったこともあって、それが次の新しい目標になっている。

外国の高校生がどんな考えを持っているのか知りたかったし、日本についてたくさんの人に伝えたかった。教室では英語を聞き取るのだけで精一杯な時間もあったけれど、夢を語りあえる友達もできたよ。

ラボ活動を通じて、英語に興味はあったけど、選考試験も学校で受けるテストとは全然違っていて、自信よりも出発前はとにかく不安で一杯だったよ。でも、書類を書いたり、選考会に挑む経験は自分自身を見つめるきっかけになったし、決定後もさまざまな準備活動や出会いの中で気持ちの整理ができるのもラボのいいところ。

→ 決定後は1年間を乗り切る英語の基礎力強化を目指してさまざまな課題が用意されています。

Q. 選考会ってどんな感じ？

A. 希望者は全国各地で開催される2回の選考会に出席し、SLEP テストと面談、ネイティブスピーカーとの会話力チェック、グループディスカッション、ラボライブラリーのすがたり発表などに挑戦します。

→ 基礎的な英語の運用能力はもちろん、プログラムの主旨をしっかり理解し、出発までの準備活動から留学先からの帰国まで確実にやり遂げられる人柄なのかを幅広く審査します。

Q. SLEPテストって？

A. 前半45分がリスニング、後半45分が英語の設問を読んで答える2つのセクションからできています。全部で145問の四者択一の選択式テストです。口語英語の理解力と文章英語に対する理解力が試され、満点は67点です。日本の教科書英語ではなく、英語圏の日常生活で使われる英語で、広範囲の話題に渡り、充分な準備を期待します。ほぼ70%以上の正解をめざしましょう。アメリカプログラムの合格基準は英検準1級合格レベルです。

Q. 出発前にはどんな準備をしたの？

A. 学校の勉強のほか、いままでに習った文法学習の基礎固め、ライブラリーを聞く、長文読解の課題に取り組む、単語力増強など、まずは英語力UPが大切です。留学先に関する参考図書を読んだり、レポートの作成、自己紹介の準備、アルバムづくりなど「自分を表現する力」を伸ばす準備や、高校生として日本やラボについて自分のことばで語れるようにスクラップブックを他の留学生と持ち寄ったり、スピーチの練習をする機会もあります。

→ ラボ高校留学プログラムでは春の連休ゴールデンウィークに留学生全員が集う準備合宿を行っています。このプログラムの歴史の中で積み上げた各種情報提供の他、北米インターンを交えた実際の学校や家庭生活を題材にしたグループセッション、留学経験者からのアドバイスなど「ラボならでは」のオリエンテーションが受けられます。

●ラボ留学プログラムでは、出発前の準備段階から、留学生を支える体制が万全に整えられています。また、日本のご家庭に対してもきめ細かいサポートを致します

Never Alone in America

I thought that I need to reset myself. I wanted to put a stop to my everyday which was repeated again and again. Even if I was in my room alone, there were so many things to do. So there wasn't enough time to look back upon my bygone days. When I was on the way home by school bus, I looked outside through the windows and recalled my days.

Though I have been here for a half year, so many fresh things to see since I always pass there by a car or school bus and didn't pay attention to the outside. Myself, I had been thinking that I became used to America, but I noticed that I have been here only a half year. I don't know well even around my house, my life in America is full of unknown things. I had almost reached the limits of my homesickness. I thought that even if I advance this road for a long time, I can't go back to Japan... And I felt so sad. Since I was too homesick, I felt like I was just spending my everyday as mechanical days. I was counting what remained of my life in here inwardly. I couldn't consult with anyone because they are really kind to me. I didn't want them to have troubled. I was thinking that kind of things again and again.

Just then, a friend on the school bus talked to me "HELLO! HOW ARE YOU?"

"HELLO! I'M GOOD. THANK YOU!" I answered unconsciously.

I was thinking myself in Japanese for a long time, so when I heard and spoke in English without realizing it, I thought that I'm sure it's an obvious fact that I'm in America. When I came to, I found all by myself in America. Then, I looked back my life in here. People who are really friendly, and my friends of my school who give me hi-five every day, my host sister and brother who give me big hugs, and host mom and dad who understand me very well. I have experienced many things which are not in Japan. At the same time I noticed that my staying in here has left only a half year.

The school bus arrived at the bus stop. I started walking to my home. I had been getting cold. I thought that I want to go home. At that time, the home which reminds me was the home in here. I was reminded of smiles of my host family. I realized that I love them all over again. Now, my life is sure to be here. Thank you so much for giving me an opportunity to come here. And chose me a very nice host family.

Mizuki from Japan living in Washington

Mizuki from Japan with her host brother.

Mizuki from Japan having fun on a family road trip.

入江美月
中国支部山口地区　大嶋ゆづえパーティ
<23期アメリカ ASPECT グループ／ワシントン州>

ASPECTのニュースレター「Melting Pot」に掲載された記事より